

## ジュガーノフ・ロシア共産党党首の世界観

### —現代ロシアの反欧米思想に関する一考察—

黒岩 幸子

#### はじめに

ロシアの発展形態については、西欧を模倣した近代化を目指す西欧派とロシア独自の発展の道を主張するスラヴ派との間で、1840年代からロシア言論界を二分する大論争が起こったが、ソ連邦の成立により公式的には終結した。西欧主義にもスラヴ主義にも優越する社会主義国家として、もはやソ連は自己の発展モデルを内外に求める必要を失ったとされたからである。

閉鎖体制を強めたソ連は、冷戦期には米国に対峙して世界の一極を形成する大国としての道を歩んだが、1980年代になると社会、経済の矛盾が露呈し始め、ミハイル・ゴルバチョフ（Mikhail Gorbachov 1931-）ソ連共産党書記長は、西側をモデルとしてソ連の刷新を図るペレストロイカ（建て直し）政策を打ち出した。この政策は、冷戦の終結には寄与したが、国内の改革は行き詰まり、ついにはソ連邦の消滅に至った。

ソ連共産党保守派の立場から、また、ソ連共産党解体後はロシア共産党幹部として、ゴルバチョフおよびボリス・エリツィン（Boris Yeltsin 1931-）による改革に一貫して異議を唱えてきたのがゲンナジー・ジュガーノフ（Gennadi Zyuganov 1944-）である。ただし、ジュガーノフが打ち出している改革派へのアンチ・テーゼは、もはやマルクス・レーニン主義への回帰ではなく、「救国戦線」、「ロシア人民愛国同盟」<sup>1</sup>等の命名に見られるように、新たな愛国主義的国家理念である。この新たな政治理念でジュガーノフは1996年の大統領選を闘い、破れはしたが、ロシア国内で一定の基盤を有するロシア共産党の地歩を築いた。

1998年夏から、ロシアは深刻な経済・金融危機に陥り、政治状況も混乱を深めている<sup>2</sup>。西側をモデルとした経済改革の破綻は顕著であり、国家院（下院）最大会派であるロシア共産党が影響力を強めていくことが

予想される。ロシアの政治動向を知る上で、ロシア共産党党首であり、そのイデオログでもあるジュガーノフの思想を正確に把握することは重要である。彼の思想については、1990年から94年に発表された論文等を基にした詳細な分析があるが<sup>3</sup>、その後もジュガーノフは多数の著書を発表して自己の世界観や思想を明確化している<sup>4</sup>。

本稿は、イデオログとしての経歴(1)、地政学的世界観(2)、冷戦後の世界秩序の見方(3)、ロシア再生の理念(4)を、1995年から97年のジュガーノフの著作の分析を通して明らかにし、現代ロシアの思想的潮流を考察するものである。

## 1. イデオログの経歴

「ジュガーノフはあらゆる立場にとっての緩衝器であり、仲介人である」<sup>5</sup>。その柔軟性と慎重さを指摘した上で、作家のアレクサンドル・プロハノフ(Aleksandr Prohanov 1938-)は、ジュガーノフをこう評している。

### (1) オリョール州時代

ゲンナジー・ジュガーノフは、1994年6月、オリョール州ズナメンスク地区ムィムリノ村(Orlovskaya oblast, Znamenski raion, selo Mymrino)で、学校教員を両親として生まれた。オリョール州は、現在も農村人口の割合が比較的高く、保守性の強い地域とされている。

幼い頃から調停、仲介に長け、指導力を発揮していたというジュガーノフは、1961年にムィムリノ村の中学校を卒業すると、17歳で同校の数学教師を務める。1962年にオリョール国立教育大学物理・数学部に入学するが、徴兵のため翌年から3年間ソ連軍に勤務し、その間1964年にソ連共産党に入党した。1966年に復学してからは、コムソモール(共産青年同盟)委員会書記等を務め、黨員としての活動実績を着実に積んでゆく。

1969年に教育大学を卒業すると、25歳で母校の物理・数学部解析講座担当教授になる。非専従のコムソモール員として、地区書記、オリョール市および州の第一書記を務めたジュガーノフは、1974年に大学を辞職

して共産党専従の道を選び、オリョール市共産党委員会書記等を務める。1978 年からは、ソ連共産党中央委員会社会科学アカデミー大学院に学び、1980 年には博士候補学位を取得した。党活動と平行して母校で高等数学およびマルクス・レーニン主義哲学を教えた。

1983 年に 39 歳でモスクワに転出するまでジュガーノフは、出身地のオリョール州をほとんど離れることもなく、「ブレジネフ体制を底辺で支え」、モスクワでソ連共産党中央委員会宣伝部に籍を置いた彼の役割は、「イデオロギーを独創的に深めるのではなく、それを通俗的に広め、組織強化に役立てること」<sup>6</sup>に過ぎなかった。しかし、1980 年代後半からのソ連、ロシアの大きな変革は、ジュガーノフを底辺から頂点へ押し上げ、彼をして共産党公定イデオロギーの再構築を行わせた。この点で、ジュガーノフはまさしくペレストロイカの鬼子である。

## (2) モスクワ時代

ペレストロイカおよびグラスノスチ（情報公開）政策が進み、社会主義そのものに対する批判が高まる中で、ジュガーノフは 1989 年に党中央委員会イデオロギー部次長に就任し、党内保守派の立場をとり続ける。

1990 年 6 月に創設されたロシア共産党は、ソ連共産党内にありながらも事実上独自の組織となり、共産党保守派が集まった。ロシア共産党中央委員会書記兼政治局員に選出されたジュガーノフが、改革に反対する保守派を結集させる思想的結節点として選んだのは、祖国を危機から救う愛国主義である。共産党公認の編年史は、創設時のロシア共産党が「正統共産主義から『国家』および『人民』愛国主義に進化した」<sup>7</sup>と記している。この頃からジュガーノフは、ロシア正教会史、非マルクス主義系ロシア社会思想史の研究に熱心に取り組んだという。

1991 年 8 月にクーデター未遂事件が起きた際に、ジュガーノフは休暇中でモスクワを離れていたが、戻ってからは、活動停止に追い込まれた共産党下級職員らの再就職斡旋などに尽力した。また、ロシア人民愛国勢力連絡評議会を率いるほか、1992 年 10 月に救国戦線の共同議長に就任して反対勢力の結集に努め、ソ連解体に対する激しい反発を示した。民族主義者や反ユダヤ主義者とも手を組んだ救国戦線は、赤茶連合と呼ば

れて内外の非難を浴びたが、ロシア政界におけるジュガーノフの地位は確実に高まっていった。

1992年11月、ロシア憲法裁判所により共産党初級党組織の活動が合憲と認められ、1993年2月に開かれた第二回ロシア共産党臨時大会で中央執行委員会幹部会議長に選出されたジュガーノフは、名実ともに共産党の指導者になった。1993年10月のモスクワ騒擾事件では、大統領と議会の和解を呼びかけたが、失敗に終わる。1993年12月の国家院選挙に当選すると、下院共産党会派の指導者として活動し、1995年1月の第三回ロシア共産党大会で機構再編後の中央委員会議長に選出された。同年12月の国家院選挙で再選され、下院第一党となった共産党<sup>8</sup>党首として1996年夏の大統領選<sup>9</sup>に挑むが、決選投票で現職のエリツィン大統領に破れた。

ジュガーノフは、著述、評論、研究活動にも熱心であり、1993年からソヴィエト・ロシア紙の政治評論を担当し、多数の論文、著書を発表しているほか、1995年にはモスクワ国立大学で哲学博士の学位を取得している。

## 2. 地政学的世界観

### (1) 大陸国 vs 海洋国

歴史的、政治的発展の要因として地理的環境を重視する地政学は、20世紀前半に欧米の世界戦略の理論的裏付けとして発達したために、ソ連では研究されなかった分野であるが、世界の政治地理が大きく変わったポスト冷戦期に見直されるようになった。ジュガーノフもまた、「最適の国家発展戦略の策定のために最大の意義をもつべきは、短期的で変わりやすい政治的ないしイデオロギー的執着ではなく、国の空間・地理的状况という安定要因である」<sup>10</sup>として、ロシアの発展を地政学的見地から模索している一人である。

ジュガーノフが用いる地政学の基本概念は、中核地帯 (Heart land) を巡る、大陸国家と海洋国家の対立という世界構造の捉え方である<sup>11</sup>。世界の歴史的発展は、広大なユーラシア大陸を枢軸として進み、その中心部にあたる中核地帯を制する者が世界の実権を握る。そのため、中核

地帯を海洋国が狙っており、ユーラシアの周辺地帯は常に、大陸国と海洋国の戦いの場となるのである。

「専制、共産主義、現在のようなえせ民主主義体制のいずれであったかにかかわらず、少なくとも 300 年間この枢軸国家であった」<sup>12</sup>のが、中核地帯に位置するロシアである。ユーラシアの大陸国家ロシアに対立する海洋国家は、かつては海を越えて広範な植民地支配を行ったイギリス、その後はアメリカである。

冷戦期のアメリカは「NATO の軍事力を支えに、ソ連およびその同盟諸国の陸海軍基地、つまりはユーラシアの中核地帯に網をかけてがんじがらめにし」、冷戦後には NATO の東方拡大によって、「中核地帯を管理するために、つまりは世界を支配するために、東欧の管理を確立し」ている<sup>13</sup>。

こうして大陸国と海洋国の対立は、ジュガーノフにおいてユーラシアと大西洋主義の対立へと転換される。

## (2) ロシア史の地政学的理解

ジュガーノフによってロシア史は、キエフ・ルーシからモスクワ公国、ロシア帝国、ソ連邦そしてロシア連邦へとつながる一貫した地政的發展として捉えられ、各時代の国境線および勢力範囲の境界線の伸縮に重点をおいて次のように概観される。

ロシア地政学ドクトリンの始まりは、プスコフ (Pskof) の僧侶フィロフェイ (Filofei 16c) による「モスクワ第三ローマ説」である。ローマ帝国、ビザンチン帝国の滅亡後、第三の、そして最後のローマとして世界を支配するのはモスクワ・ロシアであるとするこの説は、17 世紀までに「クレムリンの公式地政学ドクトリンになり」、ロシアは「すべての正教徒の法的な庇護者、擁護者に」<sup>14</sup>なったのである。

「第三ローマ説」の実現に向けた「ロシアという地政学的大国の真の創設者」<sup>15</sup>は、モンゴル・タタールに打撃を与えてロシアのシベリア進出の基礎を築き、バルト海への出口を求めて戦ったイワン雷帝 (Ivan Grozny 1530-84) である。雷帝が実現できなかったバルト海への進出、クリミア併合は、それぞれピョートル大帝 (Petr Veliki 1672-1725)、

エカテリーナ二世 (Ekaterina II 1729-96) によって達成され、帝国としての拡張を続けたロシアは 20 世紀初頭までに、欧米列強と肩を並べて帝国主義的な争いに加わるまでの一大勢力となったのである。

ロシア帝国が獲得したユーラシアの広大な領土を引き継いで、「千年の歴史をもつロシアの当然の地政的継承者」となったのがソ連邦である。東欧の同盟国を含め、ソ連がユーラシアにロシア史上最大の勢力圏を確立した第二次世界大戦後に、ロシアの地政的発展は頂点に達する。世界革命の夢を捨てて一国社会主義を選び、戦間期には民族的愛国心でソ連の結束を促したスターリンをジュガーノフは高く評価する。「ロシアが自己充足的で、いかなる援助も必要とせずに、あらゆる歴史的挑戦に応えられうる」国家になることを目指した帝国の願いと、「敵対する勢力センターにうまく対決するために、文明の近親性をもつ諸国をロシアの回りに統合する」<sup>16</sup>ことを主張した 19 世紀の汎スラブ主義者らの願いは、スターリンによって初めて実現されたのである。

あらゆるロシアの地政学的概念は、「国家の自己充足性およびロシアの周辺における独自の大空間の形成」という二つの目標に焦点を当てている。この「大空間」は、中核地帯を中心とするユーラシア大陸に形成されるべきものであるから、冷戦期に「イデオロギーの幻想を追って」<sup>17</sup>、南米やアフリカ諸国に社会主義政権を樹立させるために腐心したニキータ・フルシチョフ (Nikita Khrushchev 1894-1971) およびレオニード・ブレジネフ (Leonid Brejnev 1906-82) に対するジュガーノフの評価は低い。

1985 年に始まるゴルバチョフの改革は、1991 年 12 月のソ連邦解体にまで進み、「ソ連邦崩壊は、約 400 年のロシア史を逆転させ、ロシアをピョートル大帝以前の時代のような規模と国際的地位に戻した」<sup>18</sup>。このような事態はジュガーノフによって「何世紀もかけて計りしれぬ犠牲と損失を払って大国をまとめ、築き、護ってきた偉大なるロシア民衆に対する犯罪」<sup>19</sup>として捉えられ、ソ連邦の継承国であるロシア連邦は、失地回復の大きな課題を負っていることになる。

### 3. ソ連邦崩壊後の世界秩序

#### (1) ソ連邦崩壊のシナリオ

ジュガーノフは、ソ連邦崩壊のプロセスを、社会主義体制そのものの不備による破綻として認めようとせず、「世界制覇の途上でいかなる手段を用いても地政学的舞台からロシアを排斥しようとする、強力な国際勢力の長年にわたる骨の折れる活動」による「管理された破局」<sup>20</sup>と捉える。

「外部勢力」による破局のシナリオは、五段階からなる。(1)「政治的、社会的対立を利用」して、ロシア内部を「友と敵、同盟者と敵対者」に分断し、(2)「この二つの勢力を最大限に分極させ、両者間の妥協のあらゆる可能性を排除」する。(3)「政治的陰謀の精巧で手の込んだテクニク」で、両者の「衝突があらゆる手段を講じて扇動され」、(4)「扇動された政治的爆発」は1991年のクーデター未遂事件となり、(5)この結果、敵対者は「容赦なく一掃され」、政権にはゴルバチョフ、エリツィンら外部勢力に都合のよい者だけが残ったのである<sup>21</sup>。

党および国の指導部に敵対勢力が侵入したためにソ連が崩壊したとする説に何ら具体的証左はなく、荒唐無稽の「外国陰謀史観」<sup>22</sup>に過ぎないが、ジュガーノフはその根拠を歴史をはるかに遡って求める。

1054年の東西教会の分裂がカトリックの西と正教の東の分断をもたらし、それ以降、西欧は常に正教世界の中心であるロシアの弱体化を望んでおり、「十字軍は、異郷である回教の東のみならず、正教世界に対しても送られた」ことが指摘される。西欧は海を越えて植民地支配を強め、アメリカ大陸もその文明圏として着実に発展し、19世紀には「西欧の覇権主義に対抗する最後の砦となったロシア帝国」<sup>23</sup>が、西欧の拡張を防ぐ唯一の国家として西欧と対立するのである。

この西欧とロシア帝国の対立は、20世紀になって「西側世界のリーダーとしてのアメリカ」と「ロシアの地政的継承者としてのソ連」の対立へと移行し<sup>24</sup>、世界制覇を狙うアメリカは、ソ連邦解体後には「『新世界秩序』という単一の超国家システムにロシアを統合」<sup>25</sup>しようとしているのである。

## (2) 多極構造の世界秩序

ジュガーノフは冷戦後、そしてソ連邦崩壊後の世界秩序として三つのモデルを考える。

まず、アメリカ主導の「新世界秩序」は、冷戦時代の二極構造が崩れた後の「アメリカを長とし、NATO を世界の憲兵とする」一極構造の世界である。この場合、ロシアは第三世界と同様に欧米にとっての原料および労働力の供給基地となり、「半植民地というありがたくない役割を与えられる」<sup>26</sup>。欧米を除く世界の犠牲のもとに欧米の繁栄を目指すこの一極構造は、ロシアだけでなく他の諸国の反発も生んで、世界の混乱を招くことになる。

次に、冷戦期の二極構造が考えられる。これは、ある程度安定した世界秩序を可能にするが、ソ連が崩壊し、弱体化した「ロシアは現在、世界構造の第二極になるような状況にはまったくない」<sup>27</sup>。

そこで、ロシアの国益にかなない、現代の国際情勢にも沿った世界秩序としてジュガーノフが提唱するのは、多極構造の世界である。「第三次世界大『冷』戦にソ連が敗北」した今、「ロシアはいかなる強力な世界勢力とも対決することはできない」ために、「世界勢力の主だったセンターの間でのダイナミックな均衡の維持」を目指すのである。

この多極構造の中でロシアが占める一極を構成する要因は、もはやイデオロギーではなく、「独自の文明の基盤」である。「近年世界中で、同一の文化・文明に属する国家が接近する傾向が顕著である」<sup>28</sup>とするジュガーノフが考える多極構造は、サミュエル・ハンチントン (Samuel Huntington) が述べている「類似した文化をもつ社会が互いに協力し合う」「文明に根ざした世界秩序」に近い。ハンチントンは、「NATO の拡大を西欧諸国に限定すれば、別個の正教文明の中核国としてのロシアの役割を強調することになり、従ってロシアは、正教の境界線内および境界線沿いの秩序に責任を負うべき国になる」と述べる<sup>29</sup>。NATO の境界線をどこに引くかは別として、「正教文明の中核国」としてのロシアは、ジュガーノフの目指すところでもある。ロシアは、冷戦には敗北したが、アメリカの下位につくのではなく、正教世界の盟主としての相応の一極



をユーラシアに構成し、その文明内で影響力を有することを要求している。

ここで、ロシアの地政的發展に文明的要因が加わるが、ユーラシアにおけるソ連、ロシア連邦の領域と正教文明圏は必ずしも一致しない。ジュガーノフは、「領土の直接の統制が確実で、効果的であるのは、その領土の住民が同系統の文明に所属する場合のみである」と述べる一方で、「カフカス戦争は・・・侵略ではなかった」、ザカフカス諸国の「自由意志によるロシアへの参入」<sup>30</sup>等の歴史の歪曲、「文明としてのロシアはロシア民族の歴史的活動の結果であり・・・『ロシア的理念』の活力こそが、あらゆる多民族の幸福の基盤になった」<sup>31</sup>とする、少数民族に対するロシア民族の優越性などで異文明支配を正当化している。

## 4. 大国ロシアの再生

### (1) 過去への回帰

ソ連邦崩壊により領土を大幅に縮小し、既成の価値観を失ったロシアを再びまとめるための精神的拠り所を、ジュガーノフは過去に求める。「ロシアの再生は、何世紀もかけて精神的、道德・宗教的価値のもとに形成されてきた、共同体としての民族的自覚の回復抜きには考えられない」<sup>32</sup>として、ロシアの文化や伝統への回帰が提唱される。

「宗教的信条は、共産主義者を含む各人の個人的問題」となり、ソ連時代には否定された宗教に積極的評価が与えられる。わけでも、「長年にわたりロシア正教会は、我々の民族的、社会的、国家的存在の精神的基盤であった」<sup>33</sup>として、重要視される。

988年にキエフのウラジーミル公が、ビザンチンの東方正教会からキリスト教を受容した後、社会主義政権の樹立まで、正教はロシアの国教として権威を保ってきた。その教えは、家父長制的慈愛と道德に基づく共同体の精神にある。ジュガーノフが受け入れるロシア正教とは、宗教学、神学の観点から容認されたものではなく、文化、伝統、道德と同列にある文化的表象としての宗教に他ならない。

また、ロシア正教の共同体における家父長的愛情や相互扶助の精神は、

合理主義、個人主義を重んじる西洋の価値観に対置される。西側の資本主義やリベラリズムは、「とめどない消費崇拜」や「精神の貧困、不道德の増大」をもたらすとして否定される<sup>34</sup>。

ロシア正教、ロシアの伝統の尊重は、当然、ロシア人の民族意識の回復にもつながり、「民族的自覚」が強調される。こうしてジュガーノフは、ソ連時代に押さえられていた宗教および民族意識を、公然と国家再生の精神的拠り所として復権させている。

## (2) 国家愛国主義のイデオロギー

精神的基盤の回復の後に、具体的な国家再建のためのイデオロギーとしてジュガーノフが選んだのは、国家愛国主義である。

「今日、『新しい共産主義者』とは、高慢で保守的な特権階級であった前任者とは異なり・・・階級闘争という極論を退け・・・イデオロギー健全化の道へと決定的な一步を踏み出した」<sup>35</sup>者を指す。精神的支柱を失った国民を再度結集させるのは、もはやマルクス主義ではなく、祖国への愛国心である。

「具体的な改革を成功させるために必要なのは、別のイデオロギー、つまり、正義の『赤い』理想と祖国愛の『白い』理想を結合させる人民愛国主義のイデオロギーである」<sup>36</sup>。ここでジュガーノフが使っている「赤」と「白」の概念は、ロシア革命後に赤軍と白軍に別れて戦った内戦を想起させる。ボリシェヴィキの赤の思想は「正義」に、ソ連時代は反革命とされた白軍の思想は「祖国愛」に変換され、双方を含む「人民愛国主義」に合体されている。

西側のリベラリズムに対峙しうる、愛国主義イデオロギーの構築のために、ジュガーノフは四つのロシア的理念を挙げている。まず、地政的勢力を回復し、強い国家を目指す「大国の理念」、民族としてのロシア人が80%を越えるロシア連邦におけるロシア人独自の文明と民族意識の復活を目指す「民族の理念」、そして「社会正義の理念」および「民主主義の理念」である<sup>37</sup>。

「地政的問題の暴力による解決方法」を否定した上で、ジュガーノフは、「ロシアとの接近を公に主張する旧ソ連諸国民を、ロシアは歓迎し、

支持すべき」<sup>38</sup>と述べ、連盟、同盟のかたちでのソ連邦の再統合の可能性を楽観的に見ている。しかし、民族としてのロシア人の伝統、文化、宗教が強調される国家との連合を、多民族国家であった旧ソ連の各共和国が望むか否かは、極めて疑問であろう。

## むすび

共産党党首とはいえ、ジュガーノフはマルクス・レーニン主義を放棄したかと思わせるような世界観を構築している。共産党員の著述には通例であるマルクス、レーニンの引用は皆無で、それに代わって地政論および文明論による世界観が展開されている。

地政論からは、伸縮自在の境界線とともに連綿たる歴史をもつロシアが概観され、文明論からは、脱イデオロギー後の多極構造の世界秩序が提唱される。階級闘争を否定し、宗教や民族意識をイデオロギーの強化に利用しようとする立場が、「ロシア連邦共産党はほとんど『左翼』と呼ぶに値しない」との批判を招き、ソ連時代の超大国とロシアの民族主義の中に「イデオロギー的に受け入れやすく戦術的にも好都合」な精神を求めているに過ぎないと評価されるのももつともである<sup>39</sup>。

しかし、社会主義の優位性を強調するあまり、ソ連国家至上主義に陥り、ソ連時代を他と切り離して捉えていたかつての歴史観を脱し、連続した歴史としてロシア史を捉えている点、また、冷戦におけるロシアの敗北を認め、二極構造から多極構造に移行する世界秩序の中で、ロシアの現在の国力に見合った相応の位置を要求している点では、ロシア内外の変化を受けとめたジュガーノフの柔軟性と現実主義を認めるべきであろう。

ジュガーノフの世界観につきまとう危険な影として指摘さるべきは、次の二点である。

まず第一に、その世界観を貫く反欧米思想である。NATO を率いるアメリカが、ロシアの弱体化を望んで封じ込めを行っているとは主張するジュガーノフは、「ロシアの民主化と経済再建を促しながらユーラシア帝国の復活を防ぐにはどうすればいいのか」を長期的課題として挙げるアメ

リカの戦略研究家<sup>40</sup>と同様に、冷戦思考からまったく抜け出ていない。対欧米不信は、ソ連邦崩壊やロシアの経済改革の失敗の原因を欧米の謀略に帰し、歴史を遡ってロシアに対する西欧の悪意が強調されるまでに至る。ここに、西側をモデルとするロシアの改革の失敗が、西側モデルの否定ではなく、西側そのものの否定に発展する危険がある。

第二の危険は、宗教、民族意識の復活が愛国主義に結びつけられている点である。ジュガーノフの主張する宗教、民族意識とは、ロシア正教、エトノスとしてのロシア人の民族意識に他ならない。しかし、ソ連邦崩壊後もロシアは広大な領土にまたがる多民族国家であり、ロシア人の愛国主義の高揚が、排外主義につながり、国内の分断を招く恐れがある。

ジュガーノフの世界観に見られる欧米への不信と落胆、そしてロシア独自の発展モデルの模索は、19世紀のスラブ主義、汎スラブ主義を想起させる。また、ロシア正教を基盤としてユーラシアに広がる大陸国家を標榜している点で、ジュガーノフの思想は1920年代のユーラシア主義（evrazijsstvo）に重なる。ロシアはアジアでもヨーロッパでもなく、ユーラシア大陸で非ロシア人と融合しつつ独自のユーラシア国家を形成したのであり、その精神的支柱はロシア正教にあるとしたピョートル・サヴィツキー（Petr Savitski 1895-1968）を初めとするユーラシア主義者は、共産主義を排撃したためにソ連時代に弾圧を受けた<sup>41</sup>。かつてソ連共産党が否定した思想に、その継承者であるロシア共産党党首が回帰するという、皮肉な現象である。

「ロシア人がマルクス主義者のように振る舞うのをやめて、ロシア人のように振る舞い始めた」<sup>42</sup>との観察は、ジュガーノフにも当てはまる。現在ロシア共産党内には、「レーニン・スターリン派」、「社会民主主義派」、「大ロシア主義派」の三つの思想的潮流があり、ジュガーノフは「大ロシア主義派」の代表と考えられ、ロシア共産党イコール共産主義者との公式は、現代ロシアには適用できなくなっている。

1996年の大統領選挙において、すでにエリツィンとジュガーノフの選挙綱領に大きな差異は見られなかった。エリツィンが打ち出した強い国家、秩序ある社会、安定した家庭を目指す行動計画<sup>43</sup>は、共産党のスロ

ーガンでもあった。しかし、エリツィンは、ソ連時代の閉鎖、抑圧体制の批判をもってジュガーノフに対決し、国民に体制選択論を示すことで選挙を勝ち抜いた。

1998 年夏の経済・金融危機を契機に、2000 年大統領選挙へのエリツィンの再出馬の可能性は失われ、ジュガーノフを含む複数の立候補者が名乗りを上げている。1999 年末の国家院選挙を含め、ロシア共産党は愛国主義のイデオロギーをもって闘うことが予想される。かつて、マルクス・レーニン主義の通俗的理解と普及に努めたジュガーノフが、今やロシアの現状に呼応した、新しい理念の普及に心を砕いている。現代ロシアの正しい理解のためには、ジュガーノフ、そしてロシア共産党の思想的な流れを確実に把握することが重要であろう。

## 注

(1) ソ連邦解体に反対する救国戦線は、排外主義的団体も含めて 1992 年 10 月に結成された。ロシア人民愛国同盟は、ジュガーノフが大統領選に破れた直後の 1996 年 8 月にエリツィンの反対派を幅広く集めて結成された。

(2) 1988 年 8 月 17 日にロシア政府および中央銀行は、実質的な通貨切り下げを実施し、同月 27 日からはモスクワ銀行間通貨取引所がルーブルの為替レート暴落のために取引停止に追い込まれた。8 月 24 日に経済危機の責任をとってキリエンコ首相は解任されたが、内閣総辞職の後の政治抗争のために組閣は 10 月 2 日まで長引き、11 月現在も経済危機打開の具体的見通しは立っていない。

(3) 永網憲悟「新ロシア共産党議長ジュガーノフ：愛国共産主義の相貌」亜細亜大学国際関係学会『国際関係紀要第 4 巻第 1 号』抜刷 1995 年 1 月。

(4) 主な著作は以下の通り。内容には重複する箇所も多いが、次第に論理を膨らませて、紙数も増えている。『ロシアと現代世界』は、博士論文をまとめたものである。( ) 内は筆者による題名の和訳。

*Derjava, Informpechatj, Moscow, 1994.* (『大国』)

*Rossiia i sovremennij mir, obozrevatelj, Moscow, 1995.* (『ロシア

と現代世界』)

*Za gorizontom*, Informpechatj, Moscow, 1995. (『水平線の彼方に』)

*Veryu v Rossiyu*, Voronej, 1995. (『ロシアを信じて』)

*Rossiya - rodina moya Ideologiya gosudarstvennogo patriotizma*, Informpechatj, 1996. (『我が祖国ロシア 国家愛国主義のイデオロギー』)

*Uroki jizni*, Moscow, 1997. (『人生の教訓』)

*Geografiya pobedy: Osnovy rossijskoj geopolitiki*, Moscow, 1997. (『勝利の地理学 ロシア地政学の基礎』)

(5) James Carney, "A Communist to his Roots" *Time*, May27, 1996, p.47.

(6) 永綱、前掲書、79 頁、71 頁。

(7) Duhovnoe Nasledie, *Sovremennaya Politicheskaya Istoriya Rossii(1985-1997 gody) Tom1 Hronika*, Moscow, 1997, p.232. ジュガーノフは 1995 年から全ロシア社会政治運動「精神の遺産」中央評議会員を務めており、この政治史の編纂にも加わっている。

(8) 解散時 48 議席 (総議席数 450) で第三党であった共産党は、157 議席を獲得して第一党になった。

(9) 1996 年 6 月 16 日第一回投票の獲得票数率は、エリツィン 35.28%、ジュガーノフ 32.03%で双方が過半数に満たなかったため、翌 7 月 3 日に第二回投票が行われ、エリツィン 53.83%、ジュガーノフ 40.30%でエリツィンの再選が決まった。(Tsentraljnaya izbirateljnaya komissiya RF, *Vybory prezidenta RF 1996*, Moscow, 1996, p.146.)

(10) Zyuganov, *Uroki Jizni*, p.27.

(11) 中核地帯および周辺地帯 (Rim land)、大陸国および海洋国の概念は、ハルフォード・マッキンダー (Halford Mackinder 1861-1947) やカール・ハウスホーファー (Karl Haushofer 1869-1946) らによって、第一次世界大戦後に広まった。

(12) Zyuganov, *Geografiya pobedy*, p.33.

(13) *Ibid.*, pp.37-38, 36.

(14) *Ibid.*, p.119.

- (15) Zyuganov, *Uroki Jizni*, p.31.
- (16) Zyuganov, *Geografiya pobedy*, pp.113, 123.
- (17) *Ibid.*, pp.130, 32, 129.
- (18) Eric Hobsbawn, *Age of Extremes: The Short Twentieth Century 1914-1991*, Abacus, 1995, p.495.
- (19) Zyuganov, *Geografiya pobedy*, p.133.
- (20) Zyuganov, *Sovremennyj mir*, pp.38-39.
- (21) *Ibid.*, pp.41-43, 45.
- (22) 永綱、前掲書、111 頁。
- (23) Zyuganov, *Uroki jizni*, pp.55,60.
- (24) *Ibid.*, p.61.
- (25) Zyuganov, *Sovremennyj mir*, pp.39-40.
- (26) Zyuganov, *Geografiya pobedy*, p.76.
- (27) *Ibid.*, p.236.
- (28) *Ibid.*, pp.75, 242, 241.
- (29) Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations*, Simon & Schuster, 1997, pp.20, 162.
- (30) Zyuganov, *Rodina moya*, p.135.
- (31) Zyuganov, *Uroki jizni*, p.186.
- (32) Zyuganov, *Geografiya pobedy*, p.195.
- (33) Zyuganov, *Rodina moya*, pp.209, 236.
- (34) Zyuganov, *Geografiya pobedy*, p.211.
- (35) Zyuganov, *Rodina moya*, p.232.
- (36) Zyuganov, *Geografiya pobedy*, p.272.
- (37) *Ibid.*, pp.159-163.
- (38) *Ibid.*, p.254.
- (39) R.W. デイヴィス『現代ロシアの歴史論争』岩波書店、1998 年、111 頁。
- (40) Zbigniew Brzezinski, *The Grand Chessboard: American Primacy and its Geostrategic Imperatives*, BasicBooks, a division of HarperCollins

Publishers, Inc., 1997, p.87. かつてカーター政権の国家安全保障担当大統領補佐官を務めたブレジンスキーは、同著で、「アメリカにとって、地政上の最大の目標はユーラシア大陸である。・・・アメリカの世界覇権は、ユーラシア大陸での優位をどこまで長期にわたって、どこまでうまく維持できるかに直接左右される」(Ibid., p.30.)との地政学的見地を述べている。

(41) サヴィツキーは反ソ活動の罪を問われ、シベリアの労働収容所で12年間過ごしたほか、ユーラシア主義者の多くはスターリン時代に犠牲になっている。ユーラシア主義はソ連時代には黙殺され、サヴィツキーの著作集が初めてロシアで出版されたのは1997年である。ジュガーノフは著書の中で、ユーラシア主義者の名前を一部挙げてはいるが、「ユーラシア主義」という言葉を使った箇所はなく、サヴィツキーの思想を直接知っているか否かは判断できない。

(42) Huntington, *Civilizations*, p.142.

(43) B.N.Yeltsin, *Rossiia:chelovek, semjya, obschestvo, gosudarstvo. Programma dejstvij na 1996-2000 gody*, Moscow, 1996.